

ジャムの壺から 跳びだして

開高道子



 集英社文庫

ジャムの壺^{つぼ}から跳^とびだして

1995年10月25日 第1刷

定価はカバーに表示してあります。

著者 開^{かい}高^{こう}道^{みち}子^こ

発行者 若^わ菜^な正^{まさ}

発行所 株式^株会社^会 集^集英^英社^社

東京都千代田区一ツ橋2-5-10
〒101-50

(3230) 6100 (編集)

電話 東京 (3230) 6393 (販売)

(3230) 6080 (制作)

印刷 図書印刷株式会社

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

落丁・乱丁の本が万一ございましたら、小社制作部宛にお送りください。
送料小社負担でお取り替えいたします。

© Y.Maki 1995

Printed in Japan

ISBN4-08-748397-5 C0195

集英社文庫

ジャムの壺から跳びだして

開 高 道 子



集英社版

目次

I
こちら不思議の本家

あなたナニ山	一〇
野生にかえる	一四
メルヘンだって	一八
「怖えーよー」	二三
「港で待ってます」	二六
黒い大きな鳥	三〇
とべる とべない	三四
いま羽衣は	三八
盗った盗られた	四二
アマゾンから	四六
異形のもの	五〇
ナイターについて	五四

II ルソーとキャロルの言葉に魅かれて

ふたりの恋人.....	六〇
キャロル風に〈不思議のエッセー〉.....	六四
ルソーと父親.....	七一
『言葉への愛情』に魅せられる.....	七四
昨日の私に会いますか.....	七六
道づれ.....	八二

III 英語で遊ぼう Let's study English

お免状.....	六六
動中静.....	九二
歌を忘れたカナリヤ.....	九八
水栽培.....	一〇四

なぜか、ライオンズ	一〇
前頭葉	一六

IV 本日より、劇場日より

鬼と遊ぶ	二四
おいしい小説とほのぼのエッセー	三〇
動物物語を二つ	三四
シネマにこだわって	三八
気分は「アメリカン」	四二
私の古典から二つ	四六
ときには長編を読もう	五〇
中国料理食べ歩き	五四
緑陰でミステリーを	五八
風立てば、メルヘンチック	六三
馬の季節にちよつとウンチク	六七

スポーツの秋だ……………	一七三
地球大の現代版「奥の細道」……………	一七七
イタリアでは文庫本!!……………	一八一
最近おすすめしたい本……………	一八四
もう一つの女形……………	一九九
筋肉は躍る……………	一九三

V 料理とミステリー

なぜかチグハグ・クッキング……………	一九八
料理とミステリー……………	二〇四
いまなぜか、おしゃれサラダ!……………	二〇八
食は開高家に在り……………	二三四

VI

明日^{あした}のジャム壺

デパートで買えなくて……………二四〇

わが家の憲法……………二四四

私の成人式……………二四七

架橋を渡る……………二五〇

キャンパス落語風……………二五四

二十代、独りでチャレンジできた、三十代は——……………二五七

参考文献……………二六三

あとがきにかえて……………二七〇

初出誌一覧……………二七三

解説……………辻 邦生 二七五

I こちら不思議の本家

あなたナニ山

大阪は道頓堀にある鰻蒲焼屋は二軒つづきで、たがいに老舗、本家を看板に謳って、宗家を競っている。こちら本家鰻蒲焼××屋って。お隣どうして、これが実にアツパレみごとね。

それで思いついたのだけれど、ちょうど『サントリークオータリー』の原稿を書こうとしていまして。テーマが、この春（昭和五十八年）、新潮文庫になった『アリスの国の不思議なお料理』と八月末に同社から出版される私の処女エッセー集『不思議のエッセー』を、もからめた食のエッセーを、という依頼だったもんで。不思議の本家こちらの由来を、書いておくことを考えたわけ。

まっ、由来についてはのちほどにして。それで、ともかくホール（うちで食堂兼居間兼応接間のワン・ルームをそう呼んでます）のテーブルで原稿を書きはじめた。ちょうど、おそい朝食をお昼もかねてすませたあとでした。

グラッといきなりきて、アレツと思うまもなく部屋全体がゆっさゆっさ揺れ出し。別に

それほどオソロシイ感じじゃなかったが、どうにかしなきゃあ、とモゾモゾって風にテーブルの下にもぐり込みかけたら、台所にいた母がとんできて、ホラホラ、椅子いすのクツション、頭にのつけて、とテーブルから半分がたハミ出てる私のでかつ尻をこづくではないか。彼女はどうかして自分の入りこむスきをつくらう、とこづくのだ。彼女自身、カッパの皿さみたいに片手で椅子のクツションを頭に当て、あいている方の手でペンペンとこづくのだ。するうちにナマズの方が、ミニクイってゆすぶるのやめたみたい。結局、母の方は頭にクツションのつけてテーブルのまわりをウロウロしているあいだに、真夏の真昼の悪夢は消え去って。

おたがいのブザマさ加減を指さして笑ってるうちに、冗談で済んだ地震にあらためてゾーッとしました。テレビをつけると神奈川震度4。震度7とか8だとどうなるのでしょうか。警戒されている東海地震地区の東端に私たちは住んでいるので、地震情報にはかなりシャープにアンテナを張って暮らしてます。

震度4ぐらい、いつ、グラッときても不思議じゃないのだ、と覚悟をきめて居直ってるところへ、予想もしてなかった日本海沿岸で震度5、秋田、深浦ふかほ、酒田さかたで津波の災害を知らされると、本当にコワイ。心底、キモが冷える。地球はオコッテルゾって。

このところ仕事で父はよくロスに出かけるが、来年オリンピックが行なわれるこのロス

が、年間、大小あわせて三百回は地震がおこる、アメリカの有名な地震都市だそう。せめてオリンピック開催中はナマズ君、いや嬢であっても、おとなしくしていて欲しい、と関係者一同ひたすら願っているそうナ。一九七一年二月九日には震度5の地震で死者が六十四名出たんですって。超現代的な設備と整備を誇るロス・オリンピックの競技場を宇宙中継でテレビにクローズ・アップして紹介しながら、リポーターが解説するのをきいて、たまげてしまった。

それでもロスの場合は、地下のナマズが生きてるってこと、よく分からせてくれるから、それなりの心構えも出来ようって話だわ。死火山か休火山ぐらいに眺めてたお山が、ある日、突如、活火山だあ、とばかり噴火しておどろかす。噴火したら、もう手がつけられないエネルギーで。

イタリアのエトナ山の噴火で、火口から溶出する溶岩の流れを、途中でダイナマイトを爆発させて変えようって計画を、スウェーデン人の専門技師が請負^{うけお}ったのね。測定し計算して図面をひき、これでOKだ、という技師の総指揮のもとにダイナマイト爆発。あらかじめ設計しておいた別の溝道に溶岩を誘導して、ふもとの村を守ろうとしたら、噴出物量が予測をはるかに上廻って。村民は工事の失敗を怒るヒマもなく、アジジアジジと教会も家も捨てて、逃げ出した。

この海の家は東海地震の重度域に指定されている町にあって、晴れた日にはゴキゲンな

富士山がのぞめるのだけれど、あの富士山が永い休火山状態にピリオドを打つ日が、明日であつても不思議じゃない、とこのごろ切実に思うわけ。同時に活火山、休火山、死火山、逆に死火山とタカをくくつてたら、休火山だっただけで、モーレッツな火山活動を再開して。

あつ、不思議の本案の話ね。五年前に『アリスの国の不思議なお料理』の翻訳を出版した時、千趣会の『デリカ』で一年間の連載をイラスト付きで頼まれて、そのときのタイトルが「不思議のエッセー」。なぜかそのころから不思議大流行、不思議大好きつてのも。今度の処女エッセー集を『不思議のエッセー』にしたのは、『デリカ』で連載したタイトルを採ったといふことで。私、いま活火山のつもり。

野生にかえる

ゾウさんが死んだ。動物園で。名前はインディラ嬢、メスで四十九歳。ゾウさんの平均寿命は百二十歳くらいで、現役は五十歳くらいまで大丈夫というから、早死の方だといわれた。

彼女の死がなぜデかく報道されたかという点、それは、彼女がインドのネール首相からじきじきに平和使節として送られてきたからだ。

この報道のちよつと前くらいから、NHK以外の放送局で、クジラ、イルカ、シャチの集団陸上げ（これをさして、集団自殺といっていた）や、ギニアの自然保護園での象の大量銃殺やら、何かブッソーな話をよく放送していたので、〈平和の象徴〉のゾウさんがひっそりと死んでいったことがよけいに印象にのこった。

動物の人工管理という問題は、『野生のエルザ』なんか読むと、本当に、人間以上に手間がかかるし、また、手間をかけすぎて野生にもどれなくなった動物を自然にかえす手続きはそれ以上のものだということが、すごーくよくわかるのね。

そんなデカイ話にくらべるとウチで飼っている金魚、チイセーチイセーみたいな存在ですが。この金魚、家の近くのヨーカドーで、三年前の大岡祭に百円で釣り上げたのね。浄見寺って大岡越前の代々の菩提寺が茅ヶ崎にあつて、四月の第三土、日に市が主催している祭です。地元の商店はこれに協賛して縁日の風景を演出する。いっぱい夜店なんかも出て。綿菓子にベッコリ飴、イカ焼きにトーマロコシとか、ブーンとたまらない醬油のイイにおいがして。その横で、ホラ、おきまりのヨーヨー釣りや金魚すくいをさせる、ネ。そこで私めが釣りあげた駄キンのダー坊、いやダー嬢かな、であります。

郵便物を出しにいった帰り、たまたま通りかかつて、やみくもにあの和紙を張った針金で金魚をすくってみたくなり、年齢がいもなくドケドケとばかり、子どもたちの中に割つて入って、夢中でいい気になってたら、屋台のおばさんからすくいどめが出ちゃった。で、お持ち帰りは三匹までって。黒のデメ金と赤の和金にこのダ金が私の小指ぐらいでして、三匹をビニールの袋に水といっしょに入れてもらってぶらさげて帰った。

このダ金坊やがスジっこいくせに情が濃くて、やたらとデメたちのヒラヒラにラブコールをおくる。赤い和金は翌日、あっけなく水面に口をあけてうかんでいた。

どうして和金がそんなに早くもムザンな姿になってしまったのか、残った黒デメとダ金を観察していると、このダ金、黒デメにとりついて離れないのだ。自分のからだの二倍以上もある黒デメの出目にキスをくりかえし、ヒラヒラの尾にたわむれ、